

Q



池窪弘務

一 プロローグ

——物語は無垢で仕事熱心な青年大谷光一君が、戸建て住宅団地の一番奥にある小さな家のインターホンを押したことから始まった。

彼がマニュアルやパンフレットがぎっしりと詰まった鞆と、一体二kgの商品が入ったキヤリーバッグを引きずりながら、百軒あまりの住宅団地に迷い込んだのは、二〇二六年七月二十三日の大暑、最高気温四十度を記録した日だった。

彼の目的地が奈良県S郡T町大字Tの明生^{めいせい}団地だったので、迷い込んだという表現は適切でないかもしれない。しかし、汗まみれになり、意識もぼんやりして、ひたすらにインターホンを押して歩く彼の姿は、迷路に迷い込んだハツカネズミのようだった。

彼は犬型ロボット『愛慕^{あいぼ}』、——すなわち僕の——、セールスマンである。昔はS社の製品であったが、今は中国で作っている。技

術力の高い中国にS社が丸投げしてしまった。それをS社が逆輸入している。名前も『アイボ』から『愛慕^{あいぼ}』になった。

二

彼の仕事は7時八時きっかりに届く会社からのメールを見ることから始まる。会社に行く必要はない。メールには今日一日の彼のスケジュールが分刻みで書かれている。現地までは1時間半かかると分かって少しホツとした。行き帰り三時間はGPSを気にせずにすむ。

大谷光一は1DKの社宅に住んでいる。玄関からトイレと風呂、次に台所と居間、寝室が続く。独り暮らしには十分すぎる住まいである。一つの階に全く同じ部屋が十個並んでいる。部屋と言うよりユニットと言った方が適切だろう。十ユニットが五階建てのビルにきっちりと収まっている。ルービックみたいな。彼はその三階の五号室に住んでいる。都

会の真ん中だから、何らかの雑音はいつもしている。人の声、車の音、電車の音、悲鳴。セールスマンが都会に住む理由は、交通の便がよいからだ。何処にでも行ける。セールスマンは何処にでも出かける。

三

光一は一浪して大学に入り、バスケット・ボールに熱中しすぎて留年した。バスケット・ボール同好会は、人数が揃えばじゃんけんで敵味方に分かれ、バスケットに興じる気楽な集まりだった。男女も区別しなかった。ただ、眼の前でバストがゆっさゆっさと揺れるのには少し閉口した。

彼は大学にいる時はいつも体育館にいた。競技をしている時以外は、場所取りに奔走していた。たとえ三十分でも体育館のコートが空くと、LINEで仲間を集めた。学部も服装もバラバラな連中が三々五々集まって来た。多すぎる時はじゃんけんで選んだ。誰も来ない

時もあった。その時は、一人のエアバスケット。

同好会の中で、彼だけがバスケット部の正規のユニホームを着ていた。ルールもアバウトで、ひたすらボールを取りっこして籠に入れるのに熱中した。いつもどちらが勝ったのか不明のまま終わった。

そうしているうちに落第した。

四

一人っ子だったので親も大目に見てくれた。ようやく卒業して、駄目元でS社の入社試験を受けた。S社の子会社で定年を迎えそうな光一の父親が勧めたからだ。父親にコネがあったわけではない。父親は、まさかと言うこともあると泥酔のついでに、光一に言った。光一はそれをまともに受けて、受験した。

入社のペーパーテストは下の方から数えた方が早かったが、常務の一人が彼を強く押し

た。

——近頃では珍しい無垢な目をしている。

常務は十年程前に大リーグで投打の二刀流で活躍した大谷翔平のファンだった。面接に現れた光一は、上下に十センチほど縮めた大谷翔平にそっくりだった。大谷翔平も野球一筋の無垢な目をしていて。大谷光一もバスケット一筋の無垢な目をしていて。

光一の父親は手放しで喜んだ。——息子がS社に入社しましてねえと、聞かれもしないのにまわりに言っただけで廻った。

常務の気まぐれで入社した彼はいきなり壁にぶつかった。一台も愛慕が売れなかったからだ。同期入社秀才達は次々に愛慕を売りまくった。彼らは言った。——時代が売ってくれるのだよ

五

確かに世の中は孤独な老人で溢れていた。彼らはペットを飼うには年を取り過ぎていた。実際に飼い主に死なれ餓死するペットも世の

中に多数いた。死んだ飼い主をペットが食べてしまうという痛ましい事件も起きた。

そんな世相を背景に愛慕は売れに売れ、品切れさえ心配された。だが、彼は一台も売れなかった。彼の心の奥底に、彼さえも気づいていない疑念があった。それは水晶の欠片かひらのようにいつもキラリと光っていた。

——年寄りを騙していないかという疑念だった。

六

八時半きっかりにGPS付きのスマホを内ポケットに入れて光一は部屋を出た。「行つてきます」

と、声に出して言う。

エントランナスでいつも出会う女性がいる。彼女の名前は、山本沙苗さなえ。彼女が覗いていた郵便受けに書いてあった。何階に住んでいるのかは知らない。彼女の動きは速い。挨拶する間もなく、光一の視界から消えている。彼

女は真っ直ぐにS社に向かうのだろう。自分
は誰と出会うかも分からない旅に出る。

七

ビルの谷間を十分程歩いて、地下に潜れば、
大阪駅に出る。人が固まりになって動いてい
る。まるで蟻の集団だ。これでも在宅のサラ
リーマンが増えて、通勤客は去年より一割は
減ったと言う。環状線に乗りJR鶴橋で近鉄
の鶴橋駅へ乗り換える。ここもまだ都心へ進
む通勤ラッシュは終わっていないが、鶴橋駅
から出て行く電車は、ガラガラだ。夏休みだ
から学生もほとんどいない。冷房がよく効い
ている車内は快適だった。彼は遠足にでも行
く気分ですみずつ田んぼが増えていく車窓を
眺めていた。やがて電車がトンネルをぬける
と、奈良県である。

八

橿原市の大和八木駅から乗り換えて二つ目

の笠縫駅で降りた。無人駅だった。都心まで一時間半の通勤圏とあるが、この時間は誰も乗り降りするものはなかった。自動改札をぬけると、蟬の声は夕立のように落ちてきた。スマホで道順をチェックする。川に沿った細い道の方が近そうだ。だが、簡易舗装の道は、キャリーバッグを転がすのに適していない。鞆と一緒に運ぶのは難儀だった。鞆を肩にかけてキャリーバッグを転がすと、全身から汗が噴き出した。汗はすぐに乾き塩になった。駅前にあった自販機で水を買うべきだったと後悔したが遅かった。墓場の向こうが国道らしい。竹藪の横をぬけると国道を挟んで巨大なスーパーマーケットの看板が見えた。あそこで水を買おう。しかし、GPSに記録が残るから長居は出来ない。昼食には早すぎる。

九

スーパーマーケットは意外と閑散としていた。出会うのは老人ばかりだった。自動販売

機でスポーツドリンクを買った。五百mlを一気に飲み干した。もう一本は三五〇mlにした。これ以上荷物を増やしたくなかった。

スーパーマーケットの北側は道路になっており、道路に沿って川が流れていた。歩いてきた川である。国道を潜りまた現れた。ここから名前が『かがり川』と変わるらしい。橋の名前が『かがり橋』になっていた。

百メートルほど川に沿って歩道を歩けば閑静な住宅団地に入る。目指す明生^{めいせい}団地は、スーパーマーケットの巨大な影に隠れるように肩を寄せ合っていた。

十

団地の入り口にある鳥瞰図を見ると、川沿いの道路は真っ直ぐ東に延びている。その道と並行して二本の道路がある。団地を横切る百メートルほどの北南の道路が四本。九つのブロックの間にぎっしりと名前が書かれた家がある。よく見ると名前が白いペンキで消さ

れた家が混じっている。

川に沿ってフェンスがはられている。川の向こうにも住宅団地がある。フェンスに沿って五十センチほどの土手があるが、雑草に被われている。花壇も無残な姿になっている。

光一はとにかく一軒一軒インターホンを押していかうと思った。

真夏の真昼、インターホンは一服の清涼剤を得るための唯一の手段でもあった。とにかく冷房の効いた場所に入りたかった。しかし、インターホンを押す度に期待は裏切られた。ほとんど応答がなかった。たまに相手が出て、名乗ると無言で切られた。

十一

光一は何回インターホンを押しただろう。同じ家で二度押す勇気がなかった。闖入者は次の家に向かって立ち去るしかなかった。

一人だけ老人に出会った。花に水をやっていた。光一は、「焼け石に水」という言葉を

思い出して、少し笑った。美青年の笑顔は美しい。

川沿いの道路は団地の突き当たりまで四百メートルほど延びていた。

住宅の一番奥まで来てしまったようだ。そこから道が細くなり山並みが見える。桜並木があり、木陰がありそうだ。光一はその道を少し歩いてみようと思った。

十二

振り返っても山並みが見えるから、盆地であることが分かる。スマホで見ると背後に見えるのが二上山、右手に大和三山、正面が三輪山。

車一台がやっと通れる細い道の南側は田んぼと畑である。川を隔てて北側の田んぼの向こうに疎らに農家が見える。農家なら話を聞いてくれるかもしれない。しかし、それはダメだ。会社の指示は明生団地である。

彼は、橋の欄干のそばに腰を下ろして、貴

重なスポーツドリンクを飲んだ。ただ汗になって吹き出すだけだけれども。橋のそばに地藏がいた。綺麗な花が供えてある。スマホで地藏を探すと、それぞれの橋のたもとには地藏がいるようだ。旧農村なのだろう。明生団地に地藏はいない。手を合わせると、地藏が微笑んでいるように見えた。

一息ついたら、また、蝉の声が夕立のように落ちてきた。ここにこうしていても埒がわからない。彼は引き返すことにした。

十三

団地内は東西に三本の道が通っているから、真ん中の道を、インターホンを押しながら、Uターンして帰ろう。三本目の道は昼飯を取ってからにしよう。

——スーパーマーケットにフードコートがあった。

団地まで引き返すと、団地の端に空き地を挟んで家があるのに気づいた。通り過ぎたは

ずだが気づかなかった。他の家に比べて敷地が半分ぐらいしかなかった。三十坪ほどだろう。その家のインターホンはまだ押ししていない。

——はい

返事があった。

—— S社から来ました

—— 少々お待ちください

光一はここに来るために暑い最中、歩いてきたのだと思った。表札には田代順平とあった。

十四

田代順平の家は明生団地の一番奥にある。角地で他の六十坪の区画より二十坪ほど狭い。結婚以来五十四年もここで住んでいる。

団地は一〇三軒。空き家が十％。T町では一番少子高齢化が進んでいる。平均年齢が七十歳を越え、子供は殆どいなくなった。

順平が住み始めた一九七〇年前半は、高度成長が終わりを告げた時期だった。地価は上がり始め、私鉄のあちこちにニュータウンが出来はじめていた。ローンを組めば値段も手の届くところにあった。家族のためにも家が必要だった。「土地付き一戸建」はなんとも魅力的な言葉だった。

のどかな農村だった奈良県S郡T町は、一気に土地の開発が進み、あちこちに土地成金が誕生し、ミニバブル状態だった。

十五

明生団地は一九七〇年に湿地帯（沼）を埋め立てて市街化調整区域として造成された。

最初は、モデル住宅が一軒と——明生団地分譲中の幟がはためていた。テントがあり、事務机が置かれており、中年の痩せた女性が一人で店番をしていた。家は三、四軒で他は六十坪程度に区画された空き地だった。それがポツポツと売れ始めた。そして、七十年代

半ば第二次ベビーブームの訪れと共に、雨後の筍のように一気に増えた。

三十歳過ぎになり、仕事も家庭も安定してきた。そろそろ賃貸マンションを飛び出す時期になった。家賃の分をローンに回せばなんとかなる。通勤時間が一時間以内の土地はとても手が出ない。通勤時間はギリギリ一時間三十分以内で妥協しよう。働き盛りのサラリーマンはマイホームを目指した。かくして、土地に縁もゆかりもないサラリーマン達の新興団地が出現した。彼らは子供を二、三人つくり、中流意識が強く、マイホーム主義だった。そして、殆どが戦争を知らない世代だった。

十六

成人した彼らの子供は同居を望まなかった。彼らも望まなかった。二世帯が住むには土地が狭かったし、親も子も戦後の個人主義の中で育っていた。家制度など無縁だった。

ほとんどの子供は結婚と同時に親元を離れた。実家は結婚までの下宿屋みたいだった。核家族は核分裂を繰り返し明生団地から出て行った。

三十代中心の世代がローンで家を買って、定年後五年間嘱託で働き、ローンを返し終えた時が六十五歳。年金生活者になって十五年。子供の姿は消え、昭和の新興団地は限界集落になっていた。

四十年間往復三時間の通勤に耐えたサラリーマン達は、今は、年金、泥棒とまで言われている。

田代順平もその典型的な老人の一人だ。三十七年間大阪市内の病院薬局に勤めた。通勤時間は三時間。二万六千六百四十時間の通勤時間、つまり三年近く車内にいた。

田代順平は昭和二十一年（一九四六年）大暑の日に生まれた。五年早く生まれたら戦争を背負っていた。田代順平には何も背負

うものがない。田代順平は、今の世の中には二種類の人間がいると思う。戦争体験者と非体験者だ。田代順平は非体験者だ。母のお腹の中にもいなかった。田代順平の中に戦争はない。その意味で、令和元年生まれと一緒にだ。小学校の屋上に焼夷弾が埋まっていた。田代順平の戦争体験ってそんなもんだ。

十七

順平は団塊の世代の一つ年上だ。提灯の真ん中より一つだけ年長である。だが、いつも競争をしていた気がする。その上、一年浪人をしたから、もろに最も人数の多い年代に落ちた。その時は、長い人生でたった一年じやないかと思った。親も教師もそう言った。だが、その一年は思った以上に重かった。大学では年下の同級生が順平を呼び捨てにした。クラブに入れば同い年の奴に使われる。卓球部では学年が一年上の同い年の先輩が順平を奴隷扱ひした。彼は早生まれだったから、実

際には二歳年下だった。

就職してもそうだった。

一年早違えば先輩だ。年功序列の社会での一年遅れは取り返せなかった。一步の足踏みが最後まで響いた。順平を一瞬にして追い越し、薬局長になったのは、同期で公立大出の福井のHだった。彼も一つ年下で早生まれだった。

十八

五十五才の時、後輩に役職を抜かれた。それからは定年までひたすら守りに入った。一番下の役職で、仕事は新卒と同じだった。出世なんかとうそぶいていたが、無関心ではなかった。順平は同僚や部下には「いい人」で通っていた。人に嫌われるのが耐えられなかったから彼らの味方のように装った。その為に上司に反抗した。上司にも恵まれなかった。正座して、愛想笑いを浮かべて病院の幹部にお酌するHの姿を思い出した。あれは出来な

い。私学の出であるのも関係した。いくつもの理由を指で数えて自己満足した。

だが、定年から四、五年も経つと、客観的に自分が見え始めた。やはり能力がなかったのだ。現役で合格する能力。公立大学に合格する能力。お世辞を言う能力。全ての原因はそれに尽きる。

「いい人」は「どうでもいい人だった」と気づいた。「いい人」は「無能」と同意語で、部下は裏では笑っていたのだろう。

十九

「しかし」と順平は反論する。仕事や出世に集中できなかったのは、夢のせいだった。順平の夢は小説家である。小さい頃からの夢だった。小学校の時、朝礼の壇上で遠足の作文を読んだ。高校の時読後感想文が入選した。褒めてもらったのはその二つぐらいだ。小説家になる為に最初は教師になろうとした。教師には夏休みや春休みがある。とても、不純

な動機だった。教育大学（その頃は学芸大と
いったが）の受験に失敗して、一浪後に、最
初に受験して合格した大学に入った。私立の
薬科大学である。考えもしなかった選択であ
った。

——要するにどこでもよかった。

クラブ活動も文芸部ではなかった。理科系
の文芸部など自分とレベルが違うと思ってい
た。身体を鍛える方が大事だと、卓球部に入
った。四年間ひたすらラケットを振っていた。
卓球が好きだったわけではない。素人に毛の
生えた程度だが、殆どが大学に入ってから卓
球を始める同級生よりは強かった。だが、そ
れも内輪のことで、他流試合にはだらしなく
負けた。卒業後は、殆ど卓球をやらなかつた。
小学生の娘に負けてからは全くやめた。

結局は、——いつも敗者だった。いや、負
ける前に逃げた——。順平はそう呟いて深い
ため息をついた。

順平は父と同じ二十六才で結婚し、子供を作り真面目に働いた。社会的な責任は果たした。でも、それだけだった。いつも小説を考えて、理想と現実の間で喘いでいた。一念発起、五十才の時に、会社を辞めて作家を目指す、と、妻に宣言した。説得しても、妻は首を縦に振らなかった。次の日から満員の通勤電車の生活に戻っていた。ある意味それは心地よい繰り返しだった。焦るまいと順平は思った。才能はあるのだ。それに遅咲きの作家はごまんという。いつか作家デビューする。だが、いつまでも夢は夢のままだった。

定年後もいくつも小説を書いて応募したが、予選も通らなかった。五十才の時短気を起こさずによかった。あれから無収入になっていれば、一人娘を大学まで出すことは出来なかっただろう。今の生活もなかった。小説一本にかけたところで、才能のなさをおもい知らされただけだったろう。これでよかったのだ。

だがそう思う度に、とても切ない気持ちになった。確かに人生は結果ではないのだが。

ある時、「人生はつまらん」と洩らした義父の言葉が蘇った。あの時、初めて義父に親近感を覚えた。

妻に小説を読ませても、「わからへん」の一点張りだった。とうとう最後には、

——なんでもええから、いいよと言え！

無理難題を言ったもんだ。「つまらん」とも言えず、下手に感想を言うと、十数倍の解説が返ってくるのを知っていたのだろう。家族も票を入れなかった町会議員の候補者みただいだ。——

妻が順平に求めたのは平凡な薬剤師だった。